

# ほな、歴史通信

第16号

2000. 9. 1

八月十五日

東 敏 雄

人は長い歴史の中で蓄積され創り出された仕組みのなかで生きていく。本能だけで生きることにはできない。他の動物とは違う。だが、人はまた他の動物と同じでもある。この世に生まれ来るとき、個々のひとりひとりに知識の蓄積はない。だからこそ人にとつて、生きていくため、知り、学び、批判と継承の能力を持つことが必要となるのだ。社会の発展のためにか、いや、先ずは不幸な前轍を踏まないためである。人が創り出してきたもの、蓄積が、高度であればあるほど、轍を踏んで襲る危険性も高い。そこを生き抜き、後の人に時を繋いでいくためにも、人は歴史を学ばなければならぬ。歴史を学ぶとは楽しいことでもある。しかし、歴史には自分にとつて都合の悪い局面もあるのだ。ある時代、閉ざされ覆われた情報の下での自らの意識と行動、ありのままの自分も、見つけ出さなければならぬ歴史の鉱石である。そこを見る勇氣、解明する知性なくしては歴史は繰り返される。

あの八月十五日、もう五十五年の歳月が経った。あの日は、近代日本の長い蓄積の到達点であった。生まれ来るわれらが後世に知っておいて貰いたい大切な日の一つなのだ。これからは生きていくためにも。敗戦のあの日、どのように、どのような感慨を以て、一日を過ごしたのか。齡により、所により、状況により、違つて当然だ。だが、だからこそ、そこにある、ありのままの自分を文字として曝し、批判的に読む人に恵まれれば、前轍を避ける何かを伝えることが出来るのだ。

埼玉県川越の旧制中学校一年生、あの八月十五日、私の身分である。同級生には、あの年三月の東京大空襲から辛うじて逃れ来た人達が大勢いた。しかも、あの空襲の夜、私は、東京は目と鼻の先、埼玉県は荒川沿い笹目村の土手に立つて、燃え上がる東京を呆然と眺めていた。なのに、私には戦況を分析的に見る視点も、感覚も、情報も、批判も、まったくなかった。それどころか、学内の幼年学校進学予備選抜に進んで応じていた陸軍士官学校を目指していたのである。家の畳に散らかされていた新聞に「天皇陛下」の写真を見て、御真影を粗末に、と激しく怒る軍国少年であった。戦時教育の中で、純粹培養されたモルモットの軍国少年であった。思い起こすたび、マインド・コントロール、教育の恐ろしさを、肌身を通して感じている。

夏休みではあったが、あの日は学校に出ていた。暑い、暑い日であった。学校隣接の畑での農作業と臍氣に記憶している。十時過ぎであったか、空襲警報が発令された。あのころは連日空襲に見舞われていた。ラジオは、敵艦載機、木更津上空、と叫んでいた。当時、学内には軍隊が駐屯していた。後で考えると、あの日の兵隊達の動きは異常であった。しかし、その理由

を詮索する力は中学生にはなかった。正午、正面玄関前集合、の指示を受けた。そこには兵隊達が整列していた。私たちは、あだ名でチビ少尉と呼んでいた将校が、常に似ず小ぎれいな服装をしているのに驚いたりしていた。玉音放送はその直後に聴いた。放送内容をはつきり理解したというわけではないが、戦争が重大な局面に至ったことはわかった。直後、先輩の解説を聞いた。負けたのだよ、一言でいえばそのような解説であった。私は先輩の頬にかすかな笑みがあると見た。激しい怒りを今でも鮮明に思い起こせる。

歩き、汽車に乗り、また歩いて、わが家に帰った。その間の記憶は真つ白である。わが家は暗く、暑い日の夕方というのに、ひんやりと冷たかった。いや、冷たいと感じた。阿南陸軍大将自決、ニユースが流れていた。家全体が沈黙のしじまに包まれていた。その夜、私は寝呆けて、家中を狂ったようにひれ伏しては歩き、歩いてはひれ伏し、天皇陛下に申し訳ないと叫んでいた、という。

軍国少年の昭和二十年八月十五日である。



## 私の終戦の日

益子里子

昭和二十年八月十五日、私は旧満州の大連より少し北部の田舎町で終戦の日を迎えた。

当時、父が満鉄勤務で私達は奉天市（現在の瀋陽市）に住んでいたが、日ごとの戦局の悪化で七月末に大勢の満鉄社員の家族と共に疎開していたのである。私は、九歳であった。今から五十五年も前のことで、「終戦の日」を迎えた場所は覚えていても、その日の詳しい様子は記憶に残っていない。「太平洋戦争」について何も理解していない年齢であったし、むしろその日を境にしてからの恐怖や苦難の生活の印象が強烈であったためである。

父は終戦の三ヶ月前に現地召集され、臨月の母と私達妹弟五人はわずかな衣類と土産用品の入った行李一つで疎開した。終戦後すぐ奉天に戻るため列車に乗ったが、奉天はソ連軍の進入と満人（市内に住んでいた中国人）の暴動で治安が悪く、市内に入れないということで途中からもとの疎開先へ引き返した。

今でも強く印象に残っているのは、途中の大きな駅の遠くのホームで、何千人もの日本兵がすしづめの列車から身を乗り出し「よろしく頼む」と大声で手を振りながら運ばれていく姿である。あの人達の何人が生きて故国の土を踏むことができたのだろうか。

奉天に戻ってからは、各地でソ連兵、満人による掠奪、強盗、暴行、破壊などが起きて混乱状態が続き、二ヶ月は息をひそめての隠れ家生活、九月半ばに末の妹が生まれた。恐怖の中で産婆さ

んを呼びに行つたのを覚えてゐる。

奉天は落ち着いた美しい都市で、戦時中物資不足や校庭の防空壕に避難することは時折あつても緊迫感はあまり感じなかつたが、「敗戦の日」からわずかで市内の状況は一変してしまつた。

終戦になつても父は帰らず、満鉄の会社の人が届けてくれるわずかな金と好意でわけてくれる食糧、暖房用の石炭での、また着物や装飾品を中国人に売り食品に変えての生活、厳寒の中で九ヶ月間よく生き延びられたと思う。

やがて外出もできるようになり、焼け残つた校舎で授業が再開された。一から十までの数字と「我你他」などの中国語も学ばせられた。

奉天には難民收容所、孤児收容所などがあり、満州北部や各地から何十万人もの避難民が入り、寒さと飢えで多くの死者が出たとも聞いた。ガチガチに凍つた死体を山積みしたトラックを何台も実際に見た。郊外では凍土で穴が掘れず死体そのまま放置され、山積みになつてゐるといふ話も聞いた。とにかく想像を絶する光景であつた。

やがて翌年、一般邦人の満州からの引揚げが始まり、私達は五月末に持てるだけの衣類と必需品（熱さまし等の薬や食器、水筒）だけを持つて奉天を後にした。列車や貨車を乗り継ぎ、コ口島に向かつた。途中停車すると、満人が乗り込んできて手当たり次第略奪していった。若い女性はソ連兵にねらわれるので、頭は坊主男装してゐた。みんな大きな荷物を背負い、私も妹を背負つてひたすら日本へ帰るために歩いた。途中、栄養失調や病気で亡くなる人も出た。とくに幼い子供の死者が出たが、皆その場に置き去りにされた。埋葬する時間などなかつた。

コ口島は大陸作戦の拡大にともない日本軍が急造した軍港で、約百万を超える満州からの引揚者がここを後にしたといわれる。乗船したのは、米軍の戦車を積む大きな船だつた。故国を目の前にして亡くなる人が毎日あり、遺体は水葬にされた。汽笛が鳴らされ皆合掌した。どんなにか無念であつたらう。

どの家族も現地や引揚げの途中で子供を何人も亡くしたり妻や夫を亡くして、遺骨をかかえての引揚げだつた。遺骨を持ち帰れるのは良い方だつた。満州からの引揚げが開始され、その一期という早い時期に帰国できた私達は幸運であつたし、十歳から八ヶ月の妹まで六人全員が無事帰れたのは奇跡的だといえよう。母の苦勞は筆舌に尽くせない。

今日か明日かと毎日生還を待ち続けた父はついに帰らず、昭和三十四年、満州から持ち帰つた遺髪と爪だけを墓地に葬つた。命日は、八月十五日「終戦の日」とした。

当時の大部分の人が体験した太平洋戦争の悲劇や、命を失つた幾百万人の大きな犠牲があつての現在の平和や繁栄であると思つてゐる。

毎年八月十五日が近づくと必ず戦争に関する報道がなされる。「終戦の日」から半世紀、かけがえのない人の生命が虫けら同様にしか扱われない「戦争」は絶対におこしてはいけないし、いかに人の生命と平和が大切であるかということをしつかり次世代に伝えていくべきであらうと思う。

# あの日あの時終戦記念日

菊池博子

一九四五年八月十五日、その日は誰もが忘れ難き終戦の日である。今その遠かりし過去を思い起こして語ってみたいと思う。

戦争は益々激しさを加え、広島にそして長崎に原子爆弾が投下され、町は廃墟と化していった。それでも私達国民は、必ず勝利の夢を信じて、苦しい生活の日々を堪え忍んで来た矢先のことである。八月十五日正午より重大放送があり、大人は全員隣組常会長さん宅に集合して、拝聴せよとの連絡だった。

私は当時二十四才、大子町黒沢へ嫁いで未だ一年という若い時であった。教職を退き十四人の大家族の嫁として、又農業手伝いの一員としての生活を余儀なくされ働いていた。

その日の午前中は島の草引きを早めに済ませ、隣組長さんの佐藤さん宅に足を運んだ。十五、六名くらい集まったと思うが重大放送とは何であろうか、皆不審の思いを抱きながら時の来るのを待った。

いよいよ十二時を打つと同時に放送が開始され、玉音を聞くというので、緊張して頭をうつむけ、畏んで拝聴した。

放送の言葉は不明瞭で聞きにくかったが、「耐え難きを耐え、忍び難きを忍び」というお言葉だけは鮮明に脳裏に残り、後は何のことかさっぱり理解出来ぬまま、十分くらいの放送が終わったのであった。しかし誰一人としてこの玉音が敗戦を告げ戦争終結の詔書であった事を知る由もなかった。これは何のことか口々に話し合っているうちに、誰かが「戦争に負けてアメリカに降服したと言うことだ。」と言いだし、皆蒼然と

して言葉も出なかった。私はそれを聞いて一気に全身の力が抜けてしまった思いであった。

そこに居合わせた人達も愕然として青ざめ、悲壮な思いを隠しきれなかった。「欲しがりません勝つまでは。」の一億一心の合い言葉が、ここで空しく敗れ去ったのである。又、誰かが「三日以内にアメリカの軍人が来て、皆殺しされるかも知れない」等、憶測の言葉がいろいろ出て、生きた心地がなかった。その時はただただ戦慄を覚えるだけだった。隣組長さん宅から重い足取りで我が家へ戻った。

夕方、私は異様な気持ちになり、将来への希望は全く無くなつてしまった。私はどうなる、家族はどうなる、明日はどうなる、将来はどうなる、日本の国はどうなる・・・すべては疑問の世界へと、一変させてしまったのが、この八月十五日だった。

当時主人も兄も召集され、他人の中に自分がぼつとりと一人いるのが、無性に悲しくて悲しくて、どうにも仕方がなかった。人知れず床の中で枕を濡らす日々となつた。

後になつて「朕の一身は如何にあらうとも、これ以上国が焦土と化し、国民が戦火に倒れるのを見るに忍びない。」という聖慮を以て、終戦の決意に当たられた天皇陛下の御心を拝するときに、余りあるものを感じ得たのであった。

一方、主人の軍隊でも、詔書拝聴直後に、隊長が日本刀を引き抜いて「こんな筈は断じて無い。」と言つて振り回して大騒ぎになつたことも知らされた。

戦争の痛手の苦しみは、それから十年くらい続き、ここに五十年の経過を見たのである。今は勿体ないまでの平和の訪れ、そして日本国の輝きを見ることの出来た幸福と喜びを、この年に至つてしみじみと感ずるのである。

# 信じられなかつた敗戦

石井喜志夫

その日はかなり暑かつたように記憶している。正午に重大放送があるというので、家族の者がみんなラジオの前に集まって放送の始まるのを待っていた。

その頃はまだラジオのある家は少なかつた。我が家の属する隣組は十七、八軒だつたが、ラジオがあつたのは、我が家と旅館をやつていた家だけだつたように思う。我が家は農家だつたから、もとよりラジオなど有るはずが無かつたのだが、近所に疎開してきた人が「使つて下さい」と言つて呉れたものだつた。たぶん食料などを無心するためだつたらうと思う。

そう言うわけで珍しくラジオがあつて、空襲警報や、勇ましい軍艦行進曲に乗つた「赫々たる戦果」の放送を聞くことが出来たのである。

重大放送の時刻になつたが、雑音が激しくてよく聞きとれない。私がラジオの調整係だつたから、選局ダイヤルは勿論、音量とか音質のダイヤルを一生懸命にいじり回したのだが、結局何のことだか、はつきりとは分からなかつた。大人は「戦争が負けたのだらう。」と言つて、私は「違ふ絶対に負けないよ。」とがんばつた。日本は最後の一人まで降参しない、今に神風が吹いて、敵を全滅させるのだ、ということを感じていたから、負けるなどということは、考えてもいなくなつたのである。

その当時、日本は負けに負けて、とうとう沖縄まで占領されてしまった。いよいよ本土決戦、敵が上陸してきたら、竹槍でも石でも戦つと、小学生まで覚悟を決めていたときだつた。

「そんなことできるか。」と今では笑われるだろうが、その頃は誰もが本気で考えていた。

そのとき私は十四才、旧制中等学校の一年生だつた。

その頃の学校と言へば、勉強は殆どやらず、毎日食糧増産のために田島の仕事か、どこかの勤労奉仕作業ばかりだつた。「今日は終日実習を課します。」と言われて、朝から鍬や鎌を振りまわして働いていた。

未だ十五、六才で食べたい盛りなのに、毎日の弁当にも事欠く始末だつた。みんな腹を減らして瘦せ細つていて、たいした力仕事などできなかつたのである。が、戦時教育が徹底していたから、銃後の守りになうという気持ちでみんな真剣だつた。

学校が農学校だから、一年生は近所の農作業手伝いや学校の農園の仕事、二年生は北海道の農家の勤労奉仕などがあつた。

苦勞はしたが今となればその苦勞も遠い記憶となり、懐かしく思い出されるだけである。

日本が負けたとわかつたとき、母親達の心配は更に現実的だつた。「男はみんな殺されて、女はどこかへ連れて行かれるんだそうだから、覚悟を決めてみんな死のう。」という話になつた。その中の一人が「俺はサツマイモをいっぱい作つたから勿体ないからあれを掘つて、みんな食べてそれから死のう。」と真剣に話し合つたという。当時の母親達には、死ぬことよりも腹一杯自分も食べ、子供達にも食べさせることの方が、切実な願いだつたのである。八月と言へば、未だサツマイモも殆ど育つてはいなかつたに違ひないのに。それほどに食糧難だつたのである。今考えれば、笑い話のようなものだが……。



## 県立太田中学校生の八月十五日

明治三十三年（一九〇〇）創立された太田中学校の終戦当時の西野正吉校長は、のちに「二十年八月十五日、遂に日本の降伏で大戦も終りを告げた。日露大戦の時建ったあの光栄ある講堂で宣戦の詔書を読んだ私が五ヶ年後に同じ所で終戦の詔書を読むことになり思わず声涙共に降った」と、述べている。

戦時体制下の生徒たちは、学校工場で、食糧生産や道路工事の現場、あるいは自宅で終戦を知らされた。のちに、思い出として中学時代を語っている文章を紹介しよう。

「三年生になると教室が兵舎となって兵隊さんが宿泊し軍事訓練をしており、またその他の教室には日立工場から工作機械がはこばれ、ほとんど工場と化した。毎日が部品のネジ切りをさせられた。終戦は真弓山の塹壕の中に兵隊さんに一列に整列させられラジオ放送を聞き戦争とエンが切れた次第である。それからは、戦争中の反発から自由放縦の時代が続いた。

「八月十日をすぎると、『日本は負けたのだ』という情報が私の耳にも流れてきた。そんな馬鹿なことがという思いが強かった。

八月十五日の空は雲一つなく眩しい程に太陽が照りつけていた。夜になって、それまで敵の飛行機から明かりを隠すために電燈につけていた覆いを取った。世の中はこんなにも明るいものかと思った。

戦後は価値観が一変し、昨日まで教えたことは間違っていたと辞職された先生もいた程でした。戦後の混乱と言われますが、教科書もノートも、鉛筆も参考書も満足になく、食糧難で弁当も持てない者がいる有様でしたが、心は充実していたような気がします。」

戦前の県立中学校10校、農学校12校、高等女学校18校、商業学校4校、工業学校1校、水産学校1校の計46校を中心に、昭和二十三年に新制高等学校として発足、「学校は社会の実験室」と民主主義教育の道を行んでいく。

（野内）

## 【編集後記】

真壁郡明野町を拠点に活動する「はらんきょうの会」（代表 加藤由美子さん）は、広島、長崎で被爆した人びとの手記や手紙をもとにまとめられた朗読劇「この子たちの夏」を二年前から公民館で上演し、今年もこの朗読劇を通して平和への思いや命の尊さを訴えたようです（二〇〇〇年八月十九日付「新しいばらき」新聞）。あの八月十五日からすでに五十五年、戦後生まれが人口の約七割に達するという今日、戦争体験の風化が危惧されるなかでの貴重な試みであり、こうした輪が拡がることを願わずにはいられません。

ささやかではあれ私たちも何か、そんな思いをこめながら本十六号を「八月十五日特集号」として企画しました。長い戦争の終結点であり、戦後日本の出発点でもあるあの日の体験を文字に綴ってもらおう、このような私たちの意図を解して、四人の方が手記を寄せてくださいました。ありがとうございます。

茨城大学で長い間教鞭をとられ、現在は地域史の研究に専念されている東さん、大子町にお住まいでどなたも学校の教師として戦後の時代を活躍された益子さん、菊池さん、石井さん。あの日を迎える状況はまさに四者四様ですが、四編の体験記はどれも胸に迫るものがあり、東さんの表現をお借りするなら「前戦を避ける何か」がひしひしと伝わってくるようです。

ここ大子町で、戦争体験を記録し、継承する試みがもつとあつていい、改めてそんなことを考えています。（斎藤）

## 編集人

斎藤典生（茨城大学人文学部）  
野内正美（茨城県立歴史館）  
石井喜志夫（元 教員）  
小澤 罔彦（大子町教育長）  
吉成 英文（大子町社会教育課）  
井上 和司（大子町税務課）

## 編集発行

遊 由 文 の 会  
大子町立中央公民館歴史資料室 気付  
久慈郡大子町大字池田二六六九番地  
☎三九三三五 〇五七二一六七